

予想と違った「カッコ良さ」

別府大学文学部人間関係学科
専任講師(精神保健福祉)
尾口昌康(WEB 受講)

とても元気がもらえる講義でした。

講義を聴く前、日本一カッコいい介護福祉士と呼ばれる杉本先生は、そのルックスの良さを強みに介護のイメージを変えようとされている、そう漠然と思っていました。

しかし日本一カッコいいのは、ルックスはもとよりプロの介護福祉士としての視点や発想、そして何より実行力だと思ったのです。

VTRで紹介された事例の、ご本人のADLに合わせた手作りの「装置」を使った明け方の釣り、長崎から広島までの日帰り長距離ドライブ、どちらも一般的な高齢者施設では「無理」「非常識」といわれることでしょう。

しかし介護とはクリエイティブな仕事。「いまの夢」を引き出し、そして実現に向けてご本人と一緒にさらに高い夢や目標に向かう姿は、紛れもなく「カッコいい」ものでした。

しかし、このような実践は、上司や同僚の十分な理解がない環境で始めるには当然ながら困難が伴います。

ややもすると、Innovator は Outsider と揶揄され、せつかくクリエイティブな仕事をする意欲や能力を持った人々が離職していく現場が多いような気がしてなりません。

月並みな言い方ですが、「結果で表す」しかないのかな、とも思います。

もう一つ、強く印象に残ったことがあります。それは、介護の現場では、「ありがとう」という言葉は「感謝」ではなく「申し訳なさ」を伝えていることが多いということです。

私は現在、大学に勤務し、会福祉士や精神保健福祉士の養成に携わっており、彼らに「ソーシャルワーカーになりたいと思った理由は？」と尋ねると、多くの者が“ありがとう”と言ってもらえる仕事に就きたいから」と応えており、そのことに幾ばくかの危機感を持っています。

相手に感謝の言葉を掛けてもらいたい。

その職に就きたいと思った「きっかけ」としてはそれでも良いが、「目的」になってはならないと思うのです。

「ありがとう」に潜む申し訳なさや罪悪感に気づけない、独りよがりの支援は何としてでも防がなければと思います。

今回の講義でさまざまな思いを抱きましたが、最後に先生が話された「介護が憧れの職業になる」

その日は必ず来ると、私も確信しています。ありがとうございました。